

会議名	「アジアにおける鳥インフルエンザの現状と対策」報告会
開催日時	平成 16 年 11 月 24 日(水)午後 2 時～4 時
開催場所	農林水産政策研究所 霞ヶ関分室 セミナー室 (合同庁舎 2 号館 9 F)
主催者	F A O 日本事務所・農林水産政策研究所
参加人数(概数)	約 50 名 (農水省、府県、団体、民間会社、マスコミ)
1. 会議の概要	<p>標題：アジアにおける鳥インフルエンザの現状と対策 —東南アジア 4 カ国における日本・F A O 鳥インフルエンザ対策の実施の経験を踏まえ—</p> <p>報告者：F A O 日本事務所 遠藤保雄 所長及び小平 基次 長</p> <p>概要：平成 15 年末から平成 16 年 4 月にかけて猛威を振ったアジアの鳥インフルエンザ(以下、A I と略す)は、現在、小康状態にあるが、その現状と対策について報告された。特に、F A O では、平成 16 年 3 月に日本政府からの 160 万ドルの拠出を得て、ラオス、カンボジア、インドネシア、ベトナムで A I 対策を実施した。この報告は、その際の教訓をベースとしたものである。対策の実施状況を現地調査した報告者が、報告と今後の課題等について報告した。</p> <p>なお、この報告会開催が外務省の予算交付時の必須条件であった。政策研としても定期的に開催する公開セミナーの一環として第 2 回セミナーとして開催した。次回は来月に「アジアの農業開発援助」を予定する。</p> <p>冒頭、遠藤所長から、F A O についての P R。</p> <p>別添資料により、下記の報告(1 時間、第 1 部・終わりに；遠藤所長、第 2・3・4 部を小平次長)、質疑応答 (1 時間)。</p> <p>第 1 部 家禽産業と A I の動向 第 2 部 アジアの養鶏現場 第 3 部 国際社会の対応と教訓 第 4 部 現場における防疫状況 終わりに</p> <p>【資料記載のこと以外で特に報告すべき報告者が発言した報告事項】</p> <p>第 1 部 原因；発生国の専門家不在 問題の深刻化；<u>人間への感染の可能性</u>：(厚生労働省は人畜共通とは言っていないことに注意)</p> <p>第 3 部 3-11；プロジェクト経費の内訳 緊急機材調達のため、殺処分・消毒必需品、検査ラボ物品、研修、に限定。 3-14, 15；庭先養鶏の抱える問題と、課題が大きい。 おわりに 1. プロジェクト外からの教訓；二重構造(庭先 vs 大・中規模商業養鶏)は存在。 3. 必要な対応の方向；潜在性 A I との共存は可能。 4. 日本の役割；日本でもアジア経由で再発生があるだろう。防疫の水際作戦と消費者の過剰反応防止が大切。 アジアにおける日本の存在感を示すこと：技術協力、貧困撲滅。 日本が主導権を。</p> <p>【質疑応答】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本に侵入した A I の起源について 遺伝子分析から、中国南部とは違うようだ。(消費安全局) ・日本の家畜衛生行政；都道府県 178 の拠点に高い技術レベルの獣医が二千百人。 移動制限により地域でブロックする(京都の例は例外)。世界で例を見ない家畜衛

	<p>生行政機能が再認識された。日本はパラダイスのような国。しかし、そうでない国が日本を取り巻いていることを忘れるな。BSEとは異なる大きな問題を抱えている。日本の商社、メーカーも関心を持つ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワクチンの効果？ (中国、インドネシアでは使っている。) <p>インドネシアでの疫学的効果は追って報告。国の検査を通ったものを使うシステム。</p> <p>沈静化には役に立った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本でのワクチン使用の見通し？ <p>不活性化ワクチン：重症化防止には役に立つが、感染防御には役に立たない。診断の邪魔になる。予防的にはワクチンを打たない。万一の場合は、備蓄（320万2回分）を使う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FAO本部の技術支援予算はアジア軽視、との声があるが？ <p>FAO本部はアフリカは飛蝗、アジアは鳥インフルエンザ、の2面作戦をとっている。</p> <p>鳥インフルエンザについては、結局のところ日本が負担。</p>
<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>この問題は政府、関係団体レベルの話、仮に大学、民間から委託課題への応募があったとしても、当協会が採り上げるべき課題では無かろう。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>